

# 大陸(南支)

## 南支派遣節兵団従軍記録

—南支派遣独立第六十六部隊—

神奈川県 高羽 正雄

第一部 任地へ出発より復員・帰宅までの行動日

程

昭和十八年十月二十七日、二回目の召集令状により、  
(二回目は昭和十六年十月十五日で、当時三十歳、痔  
病のため即日帰郷)千葉県柏市東部第八十三部隊に入  
隊。夏服を支給されたので南方派遣と直感した。

昭和十八年

十一月十日 軍用列車にて柏駅出発

十一月十二日 夜、輸送船にて門司港出航

十一月十六日 揚子江河口呉淞通過

十一月十七日 南京上陸

十一月二十七日 南京出航

十一月二十八日 上海・揚江鎮着

昭和十九年

三月十日 上海・飯田棧橋(呉淞) 出航

三月十四日 台湾・基隆着

三月十七日 台湾・基隆出航

三月十八日 台湾・高雄着

三月二十八日 台湾・高雄出航

四月一日 支那広東省・黄埔上陸

四月六日 広東省・新会県江門着

四月六日(二十三日) 江門付近警備

四月二十四日〜昭和二十年三月九日

湘桂作戦参加

昭和二十年

三月十日〜六月二十三日 湘桂作戦参加

六月二十四日〜八月十四日 反転作戦参加

八月十五日 反転作戦参加中マラリアに罹かり後送さる

（終戦は途中で知らされた）

九月四日 漢口第一五八兵站病院入院。体調回復後は使役として病院の清掃などに従事

昭和二十一年

四月十五日 同病院出発

四月二十二日 上海南市病院へ再入院

五月八日 同病院出発。市政府に一泊

五月九日 上海一四兵站宿舎に一泊

五月十日 米国リバイ船に乗船

五月十一日 上海港出航

五月十四日 博多湾沖に到着

久しぶりに懐かしの故国日本に無事帰還。一刻

も早く上陸をと皆胸を高鳴らせていた。

五月十八日 待ちに待った故国に上陸した。

五月十九日午前五時、駅弁の支給を受け、博多駅

出発。

五月二十日午後五時、東京駅着。夜七時ごろ帰宅。

第二部 蘆溝橋での一発の銃声で支那事変勃発。

昭和十五年十月十二日大政翼賛会発足し、世は戦時

色一色となり、支那事変は次第に拡大し、日本軍も支

那大陸奥地へ奥地へと、凄まじい勢いで進攻していっ

た。

昭和十六年十二月八日、ついに天皇陛下の宣戦布告

により日、米、英も戦争態勢に突入した。ラジオは

「日本海軍航空隊は十二月八日未明、米国真珠湾を奇

襲攻撃し、敵戦艦を轟沈、大戦果を挙げた」と大々的

に放送したため、一億国民は大勢声を上げ、異常な緊

張感に覆われた。

私は昭和十八年十月二十七日、柏市東部第八十三部

隊に入隊、所属部隊は独立混成第二十二旅団独立歩兵第六十六大隊第九四〇一部隊（春日隊）と知らされた。任地の中国広東省新会県江門に着く前、途中、台湾海峡は敵潜水艦が出没し、極めて危険状態が続いているとの情報で、揚子江を遡り、十一月十七日南京上陸。十一月二十七日、南京出發、十一月二十八日上海揚江鎮着、昭和十八年十二月一日より昭和十九年三月九日まで軍事教練を受け、教官は一緒に召集された宮崎博尋軍曹、藤間政治軍曹、椎名兵長だった。

当時、気候は支那大陸特有の三寒四温で、寒さは夏服のせいもあり身にしてみた。夜は寒さ凌ぎの同僚の山田学君と背中合わせにしながら寝たが、その山田君も早く故人となってしまった。

昭和十九年三月十日 上海飯田棧橋（呉淞）出航。

三月十四日 基隆着。輪送船の下は小船がバナナ売りの台湾人が来たので五銭買った。三月十八日 高雄着。上陸が許され、久しぶりに風呂に入り生き返った気持ち。三月二十八日 高雄出航。

昭和十九年四月一日 広東省黄埔上陸。四月六日夕方、任地広東省江門に到着。根津中隊長より「長い旅路ご苦労だった。今夜は食事したら早く寝るように」との言葉を頂いた。四月七日、今日から初年兵教育が始まり教官は若い三宅見習士官だった。ある日、個室に呼ばれ書類を見ながら「お前は大学を出ているから幹部候補生を志願したらどうだ。体は楽になるぞ」と強く勧められたがお断りした。「どうしてだ」と理由を聞かれたので、「自分は現在、面倒を見なければならぬ年老いた両親と、また結婚後二年の女房がおりますので一日も早く帰りたいのです」と率直に申し上げたら、「そうかお前は相当頑固だなあ」といわれた。そうはいったものの自分は少しでも早く体が楽になる地位に就きたいと思いい初年兵の訓練には真面目に一生懸命努力した。その甲斐あってか思ったより早く第一期の検閲にて第一選抜の上等兵に進級し、とても嬉しかった。

配属は山崎小隊の擲弾筒班で班長は露崎善俊兵長だった。その露崎さんは兵隊臭さがなく、よく面倒をみ

てくれた人である。

当時、同じ小隊に金子上等兵と大場兵長がいて、二人に呼ばれ「おい高羽！一選抜の上等兵になったっていばるなよ。ここは戦地なんだぞ。いつ、何されるかわからないぞ、よく覚えておけ」と、おどかされた。

今二人はどうしているか、会ってみたいですね。

昭和十九年六月二十四日より湘桂作戦にも参加した。ある部落で夜、敵撃を受け露崎班長より「おい高羽、擲弾筒撃て距離三〇〇」の命令を受け一発撃ったら敵襲の喚声がおさまった記憶は忘れられない。

昭和二十年六月二十四日より反転作戦中、マラリア病に罹り、行軍も苦しく途中、大陸の地に置き去られ野垂れ死にするかもしれない不安感を覚えたこともあった。その後、昭和二十年八月十五日、マラリアが意外に重いと軍医の診断で後送され、途中で終戦を知り、擲弾筒も没収されたが身柄はどうなるのか不安感を抱いた。

昭和二十年九月四日、漢口第一五八兵站病院に入院、体調回復後は使役で病院内の清掃や便所掃除もさせら

れた。

そのころ、内地へ復員する兵士たちが奥地から揚子江を下ってくる船の中から嬉しそうに手を振っている姿を見ては自分も早く帰りたい郷愁の念にたまらなかつた涙を流したこともあった。

昭和二十一年四月十五日、同病院退院。四月二十二日、上海市病院へ転院。五月八日、同病院退院。市政府に一泊。五月九日、上海第十四兵站宿舎に一泊。五月十日、上海港にて米国リバティ船に乗船し、五月十一日、上海港出航。五月十四日、博多港沖停泊。五月十八日、博多港上陸。順正寺に一泊。五月十九日午前五時、駅弁の支給を受け、博多駅出発。五月二十日午後五時、東京駅着。夜七時ころ帰宅。博多駅から自宅へ電報を打ったので、家族が無事なら必ず駅まで出迎えに来ているに違いないと思いホームを隅まで探したがおらず、やはり家族に何か異常があったのかとも暗く心配しつつ午後七時頃帰宅。門が閉まっていたので裏口から入ると偶然にも家内が井戸端にいて顔を見るなり、びっくりしたあまり、いきなり「お母さま、

お母さま」と呼びながら家の中に入ってしまった。玄関から入ったが、両親、家内、全員嬉し涙で、ただよった、よかったの涙声で迎えてくれた。自分も一瞬、放心状態で泣けてしまい、その時の第一声は何をいったか覚えていない。電報は翌日に届いた。

### 【解説】

昭和十八年十月召集、二回目の召集というのが一回目は即日帰郷であるから第一回の召集と同じことである。

昭和十八年というと、二月にガダルカナル島より撤兵。三月朝鮮に徴兵制、天皇、木戸内府と終戦促進のことに関し御談合。四月山本連合艦隊司令長官戦死。

五月アツ島玉砕、木戸内府、高松宮と終戦に関し談合。七月国民徴用令改正公布、女子学徒の動員決定。

八月東部ニューギニア及ソロモン群島方面の戦況ますます悪化。米英両巨頭第一次ケベック会談（対日統合戦略協議）、キスカ島放棄公表。九月イタリ―無条件降伏。台湾に徴兵制施行方針決定。南方在留邦人に徴兵制適用。十一月兵役法改正。大東亜会議終了。タラ

ワ及マキン玉砕。カイロ宣言署名。テヘラン会談中スターリン、ドイツ降伏三カ月後対口参戦を仄めかす。十二月徴兵適齢一年繰上げ。

この年表を見ると日本の戦況は下降し、物資は欠乏、欧州の戦局末期状況、正に日本は起死回生の道を求める作戦を……という時期であったと思う。その一つがインパール作戦と中国の一号作戦ではなかつたらうか。

昭和十九年一月七日、大本営陸軍部はビルマ方面軍に対し「インパール」作戦実施を許可。二十四日「一号」作戦実施を決意す。三月八日インパール作戦開始。四月十七日、京漢線打通作戦（一号作戦）開始。しかし、四月インパール作戦の蹉跌が始まり、六月十五日サイパンに米軍は上陸した。

このような時に三十歳で執筆者高羽氏が召集された。この時期に妻帯、子供を残して三十歳で召集された未教育補充兵が非常に多く、その方たちの戦地での戦没者は多かつた。高羽氏の例を取って、独立歩兵第六十六大隊の湘桂作戦での未教育補充兵の状況、足跡を辿ってみる。

昭和十八年十月二十七日、千葉県柏市東部第八十三部隊入隊、二週間経って柏駅発というから、未教育、しかも中年の召集兵にほとんど訓練はしなかったと思う。本来なら補充隊で三カ月程度の基本教育をして、一期検閲後に外地へ出発というのが常識であろうが、十八年末とあれば無理であったのか。

しかし、幸いなことに十一月十二日門司港出航、十六日揚子江河口呉淞（上海）通過、十七日南京上陸とある。当時、制海空権は米軍の手中にあり、対馬海峡や朝鮮海峡で潜水艦の雷撃を受け海没した輸送船が多かった。

台湾へ出航する間、上海で三カ月、この間こそ教育の好機であったが、兵站住まいでは、体操か駆け足程度ではなかったか、分隊教練も実弾射撃もできなかったのでは、少なくとも徹底的訓練はできなかったであろう。台湾高雄でも同じであったろう。四月六日、ようやく広東省新会県江門に着き、各隊に配属となり、ようやく兵隊としての生活になったと思う。その間六カ月である。

生活も気候も、食物も水にも慣れぬ未教育兵が、湘桂作戦（一号作戦）発起二カ月前に到着したのである。部隊は作成準備中であり急遽初年兵教育が始まった。

一部の者は体調を崩し入院した者も若干あったと思う。教育する教官も助教の下士官も古参兵の助手も、教育される補充兵も大変であった。基礎的な体力のある者もない者も、皆故郷に妻子を残し、精神的にも肉体的にも過酷な訓練と感じたことであろう。

湘桂作戦は支那派遣軍というより我が陸軍建軍以来の大作戦で、中国大陸を縦断（北支―中支―南支―仏印）するもので、歩兵はこの間徒歩である。兵隊の表芸は射撃、剣術、行軍である。もちろん、戦闘教育も大切であるが、作戦では銃剣を持ち、食料、衣料に小銃弾百八十発、手榴弾二個を背負ったり腰の帯革に通した薬盒に入れ、水筒（水一リットル余）、飯盒、これだけで四〜五十キロである。一会戦百里（約四百キロ）、一日約四十キロの行軍である。

高羽氏の同年兵の湘桂作戦の発起から復員までの戦没者数は六十余名であり、そのうち大部分が戦病死者

である。同部隊へ補充入隊者の約七〇パーセントが戦没しているのである。前記のような重装備で毎日四十キロ、連続一週間か十日間の行軍である。若い兵隊でも練達の下士官でも作戦行軍中、行軍の苦勞が重なれば戦闘が早く始まらないかと、矛盾した思いを持ちつつの行軍である。したがって前方で銃声が聞こえ、撃ち合いが始まれば後方を歩いている者たちはや々と停止できると、内心ホッとするのである。

戦闘により戦死、戦傷するかもしれない予測より、現在の苦勞から抜きたいというのが、いつわらざる心境であった。現役兵の若い者でも行軍の苦しみには耐えられず落伍しそうになる者もいるのであるから、二十歳歳の未教育補充兵にとっては死より辛い苦しみであった。まして、マリアアの熱病や、粘血便の出る下痢患者は「このまま置いていってくれ」という者もある。しかし、作戦行軍中の落伍は結果的には捕虜になる可能性を含め死とのつながりである。

上官や上級者、指揮官は数名の介護者を残し前進を続けなければならぬ。一人の落伍者により三人の戦

力が欠けるのである。幸いにして後続部隊や患者收容隊に預けることができると、心を鬼にして指揮官は前進を続ける。これが湘桂作戦中行軍の表情であった。まして独立大隊には乗馬は一頭ぐらいで、他は重機関銃や歩兵砲の馬匹のみである。

独立歩兵大隊、独立混成旅団には直属の輜重隊や自動車隊を持たぬので、旅団に一、二個中隊の輜重、自動車隊が臨時に配属される程度である。湘桂作戦の第二次作戦が発起したのは九月上旬であり、終戦は広西省全県付近で戦闘中であった。

その日から十月十日、揚子江北岸、湖北省武穴鎮付近に到達するまでは戦闘はなくとも行軍と若干の休止を除いて全部行軍である。もちろん武装解除前であるから兵器は自ら持つてである。したがって、戦争が終結してから兵站病院などで死亡した兵隊も多数いたのである。

このような苦勞を経つつ生還できたことに高羽氏も感謝しつつ、亡き戦友の霊を慰めるべく、昨年の靖国神社の慰霊祭には夫人同伴で出席された。